

平成10年度
(1998)
第38回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌清田

【 専門委員長 寸評 】

男子は予想通り、札幌藻岩の圧勝に終わった。ノーシードから準優勝した札幌光星の健闘も立派である。また、函館・十勝をはじめとする地方のレベルの向上を感じる大会になった。

シングルスでは第2シードの橋場（札幌藻岩）が先輩の松永（札幌藻岩）を接戦の末に破った。これは全国に通用する選手が2名になったことをも意味しており、インターハイでの活躍が期待される。また、ベスト8位全員が札幌支部となり、札幌支部のシングルの層の厚さを示した。ダブルスでも、松永・橋場組（札幌藻岩）が安定したプレーで圧勝した。日大の松永・岩橋組、札幌啓成の永沼・中村組の健闘も光った。

女子は予想通り第1シードの札幌清田が優勝、第2シードの札幌静修が準優勝となった。函館東が男女とも第3位に入り、レベルの向上を印象づけた。

シングルスは第1シードの瓶子（札幌清田）が安定したプレーを続け、6試合中に失ったゲームはわずかに3というものであった。準優勝はノーシードの高山（札幌清田）が第2回、第3回戦と苦戦しながら、その後安定したプレーで決勝進出を決めた。第3位の富山（札幌清田）、菊地もよく健闘した。ダブルスは、瓶子・富山組が予想通り優勝し、ノーシードから上がった阿部・武田組が準優勝となった。第3位に入った石川・矢島（滝川）組は大健闘、特に第2シードの田辺・松沢組、（札幌静修）を破った試合は、大番狂わせといえる。ベスト8までに、地方支部から3組入ったことは、女子においては、特に、札幌との差を縮めたものとなった。

函館大沼プリンスホテルのテニスコートという好条件のもとでの試合となり、選手・監督にとっても印象に残るものとなった。

【全国大会】

男子団体の札幌藻岩は2回戦・前橋育英、3回戦・鹿児島商を破り、準々決勝に臨んだ。相手は第1シードの堀越（東京）、DとS1で勝負は決着した。S2の松永は全国シードを持っている鎌野と対戦。第1セット6-1で奪ってリードしていたが、打ち切りとなり残

念な結果となった。しかし、ベスト8位は立派な成績である。

女子団体の札幌清田は安田女子(広島)に惜敗したが、良く健闘した。近年にない安田女子の強さが輝いていた。

個人戦は男子の大活躍が目立った。男子シングルの松永(札幌藻岩)は、全国的に有名な選手を次々に倒し、5回戦(準々決勝)に進出した。相手は地元の宮崎(高知・土佐塾)で、ファイナルゲームのタイブレークで惜敗した。この後、宮崎(土佐塾)が第1シードの田口にも勝って優勝したことを思うと、松永の力が全国でもトップレベルにあることは疑いもない。橋場(札幌藻岩)も3回戦まで進出し(ベスト32)、北海道のレベルの高さを示した。男子ダブルスの松永・橋場組(札幌藻岩)は強豪の浦和学院、湘南広大附属、高知土佐塾、堀越の実力あるペアを次々倒し、準決勝に進出。福岡柳川の潘瑞鴻・堂野組に1-2(5-7、7-6、5-7)で惜敗したが、全国第3位の実力は見事というほかない。

個人戦女子の方は、シングルスは第2回戦で全員が姿を消したが、ダブルスの瓶子・富山組(札幌清田)が3回戦まで進み、ベスト16、実力を発揮したといえる。全国的に通用する選手が北海道から生まれる時代となり、テニス関係者の努力が少しずつ評価されたものと考えている。

(専門委員長 横山 俊之)

優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

函館で行われた全道大会、皆、「絶対優勝するんだ!」という思いを心に秘め、団体戦へと臨んだ。この日は、とても天気がよく、風もほとんどなく、テニスの試合には最高の舞台であった。世間からは、藻岩高校が勝つのは当たり前という目で見られていたが、全国大会につながるこの全道大会は、絶対に負けられない大会なので、先生はもちろん、皆の表情は厳しかった。初戦から皆集中していて、確実にポイントを重ねていき、危なげない試合で順当に勝ち進んでいった。そして、決勝戦、全国大会へは1校しか行けないので、プレッシャーも多少あったはずだが、お互いチームメイトを当てにせず(もちろん信頼はしているが)、自分が絶対に勝という気持ちでやったので、もう結果は言うまでもない。“完全な勝利”で決勝戦に終止符を打った。

皆、勝利の瞬間、全国出場を決めたことにほっとしたのか、笑顔がもれた。だがこれは本当の笑顔じゃない。先生はもちろん、皆分かっていた、ここで終わりじゃない、ここからが始まりだということ。全国まで残された時間は後わずかしかないが、“全国優勝”という目標に向かって、皆最後の追い込みの練習に励んでいる。栄光は果たして……

(札幌藻岩高校 主将 松井 洋介)

優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

「清田一本先リード!」、全員で力一杯に叫び、コートに響き渡ったこの言葉は「絶対に勝つ!」という私達一人一人の闘志に火をつけました。決勝は札幌支部予選と同じ、札幌静修高等学校。審判の試合開始の声とともに、みんな全力でボールを追いかけ、1ポイント、1ポイント自分の出せる限りの力を出し、確実にポイントをものにしていきました。

・・・・この気合い、この集中力・・・・今までにない程の勝利への執念が、「全道優勝」という最高の結果へと導きました。この「勝利への執念」というものが、私達清田高校の持ち味である「粘りのテニス」を生むのだと、改めて思いました。私達がこのように頑張ってくる事が出来たのはチームメートや父母の応援、その他色々な方々の応援があったからです。皆さん、本当に心から感謝しています。そして、誰よりも私達に熱いご指導をして下さった、緒方先生。本当にありがとうございました。

私達はテニス部でいろいろなことを学びました。そして、テニスを通じてたくさんの人と出会うことが出来ました。これら全ての出来事は、私達に残された一生の宝物です。清田高校テニス部であることを誇りに思い、これからも頑張っていきたいと思います。

” Shining” を合い言葉にして・・・・

(札幌清田高校 主将 瓶子 理恵)

全国高校総体 (第88回全国高等学校庭球選手権大会) 高知

8月1日～8日

高知県立総合運動公園テニス場

高知医科大学テニスコート

サンピア高知テニスコート

男子	個人戦シングルス	優勝	宮崎 雅俊 (土佐塾)
	ダブルス	第3位	松永一紀・橋場俊輔 (札幌藻岩)
女子	個人戦シングルス	優勝	金城 理美 (園田学園)

平成10年3月

第20回全国選抜高校テニス大会 参加報告

札幌稲雲高等学校 佐々木雄介

(札幌支部顧問会議への報告書)

1 事前合宿について

初出場の一昨年と昨年、稲雲高校は神戸に立ち寄って2日間の事前合宿を行った。両年とも、初日は夙川学院、2日目には園田学園に赴き、午前中は普段の練習に参加させていただき、午後から試合を行うという日程だった。全く異なるチームカラーを持つ両校は、ともに何回も全国制覇の歴史を持つ強豪中の強豪である。

一昨年と昨年を併せた戦績は、ちょうど100試合を消化して3勝97敗。見るも無惨な結果も当然と言えば当然なのだが、私たちが手にした成果の大きさは勝ち負けの数字でははかり知ることができない。

貴重な成果の一つは、大舞台に怖じない試合度胸だった。経験不足から気後れしてしまいがちな弱小チームにとって、これはとても大きなことである。一流チームの日常に接して、そのとてつもない実力を肌で感じた経験は、「これ以上強いところはないのだから」という開き直りと、「私たちの力だって通用しないわけではない」という自信にまで発展して、全国大会本番を戦う上での精神的な支えになってくれたことは疑いない。

そしてもう一つは、一流チームの澁刺とした練習風景を目の当たりにしたこと。緊張感に溢れ、それでいて誰もが明るく生き生きと動き回る様子は、“カルチャーショック”と呼んでいいほどのインパクトで生徒の意識に変化をもたらしてくれたのだ。

付け加えて、様々な練習方法や先生方の言葉を通して、私たち顧問がかけがえのない勉強の機会を得たことは言うまでもない。

さて、今年はそのビッグネームを、図らずも“柳川”に求めることになってしまった。ことの発端は、私が昨年の19回大会で対戦(1-4負け)した佐賀の龍谷高校に事前練習をお願いしたこと。今年の龍谷は惜しくも九州大会で敗れて本大会には出場できないのであるが、顧問の新開先生は申し出を快く聞き入れて下さった。しかも、札幌の高校がわざわざ練習試合に来ると言うことで、親交のある幾つかのチームにも声をかけて下さったのである。佐賀県総合運動場のコートに集まったのは、昨年の選抜大会で夙川を倒す金星をあげて注目を集めた福井の仁愛(中国地区第1代表)。山口の西京(中国地区第2代表)。そして柳川……地図を見て知っただけけれど、福岡県柳川市は佐賀市の隣町である……この3校に龍谷と稲雲を加えた5校が、2日間にわたって、ランダムに相手を見つけて試合をするという一大イベントになった。昨年、たった1試合を交えていただいたという関係を頼りにかけた不躰な電話が、生徒たちに素晴らしい経験の場をもたらして

くれたのだ。

この3年間の選抜とインターハイを通して感じたことは、全国の強豪チームが、私たちに極めて温かく好意的な対応をして下さることである。私たちが巡り会えた幾つかの貴重なコネクションは、稲雲高校が全国大会に出場しなくなった将来の北海道代表チームのためにも、大切に守って引き継いでいかなければならない大切な財産だと思う。

2 ベンチについて

思えば、このチームは、私が京都インターハイの引率を終えて戻ったあの暑い夏の日々の練習試合で、静修・旭丘・平岡の3校に完膚無きまでに打ちのめされるという嵐の中に船出したのだった。全員が高校に入ってからテニスを始めた雑草集団と一緒に戦った日々は、不安と試行錯誤の繰り返し。しかし、それだけにチームに対する思いもこれまでとは全く違うものがあった。そして、私にとって今回の選抜大会は、監督として携わるチームの初めての全国大会のベンチに入ると言う点で特別な意味を持っていた。なぜなら過去3回の全国大会で、札幌稲雲の監督は佐藤先生。私は引率教員として応援のスタンドに座るだけで、一緒に練習して戦ってきた選手に対して何の力にもなれない自分に歯痒い思い思いをするしかなかったのだ。

選抜・インターハイを問わず、全国大会の団体戦では、監督として登録された1名か、それに代わる登録選手がベンチに入ることを許される。複数の教員が指導していても、ベンチには1名しか入れないのだ。「公平を期する」の原則に従えば異論を差し挟む余地もない。しかし、漏れうかがうところによれば、北海道でも全国に倣って“ベンチ1名”のルール導入が検討されているとのことだ。しかし、私は大いに反対である。

第1に、試合も重要な指導の機会だということ。大会本番の真剣なベンチワークを通してしか選手に伝えられないことがどれほど多いかは、テニス部を指導しておられる先生方にしわかっていただけることと思う。

第2に、後進の指導者育成の観点から、ベンチワークを通しての顧問の成長というものを重視すべきだということ。数えれば、ここ3年間、地区と全道を併せて12回に及んだ清田高校との団体戦決勝のベンチで、試合を通し、肌で感じて、緒方先生から学んだことは、この紙面には書ききれないほどたくさんある。近年、札幌地区大会でも、全道大会でも、若い第2第3の顧問の先生の姿が見られるようになってきた。それら、次代を担う先生方の成長の場を、公平という大義名分の元に奪い去ることになりはしないかと危惧するのである。

かく言う私も、過去、2人の教員がベンチコーチを行っていたことによって、なにがしかは有利に試合を進められたという事実まで否定するものではない。しかし、それが目的でこのことを力説しているのではないことを、どうかご理解いただきたい。

3 1回戦敗退

1回戦。京都・久御山^{くみやま}高校と対戦。札幌稲雲同様に、公立の新興勢力である。しかし、残念ながら、今年も勝てなかった。S1の試合、4-4でデュースを繰り返す中、あまりにも残念なミスジャッジが・・・・あ、これを言うてはならないのは百も承知のこと・・・・敗軍の将が兵を語る言葉としては“愚痴”“泣き言”“言い訳”以外に残って

いない。

帰札後、久御山高校の永井先生からお電話をいただいた。予想もしていなかったことだったので驚いてしまったが、一頻り試合の話をして健闘を称え合った後、ともに厳しい状況の中ですが、お互いに頑張りましょう、という言葉で電話を切った。

1回戦 対・久御山（京都）

2 - 3

D 1	山田絵美・川口まどか	3 - 6
D 2	山田洋子・星野尚子	0 - 6
S 1	西森由佳	4 - 6
S 2	河原崎典子	6 - 3
S 3	塩幡絵美子	6 - 1